

# 明治 37 年の腸チフス流行と一高自治寮

高原 智史

2020 年の駒場キャンパスは、新型コロナウイルスのために困難な事態に陥っているが、明治の第一高等学校<sup>1</sup>においても流行り病は重大な脅威だった。明治 37 年、日露開戦<sup>2</sup>直前の 2 月 4 日に一高の寄宿寮内で腸チフス患者が発生し、その第一号患者<sup>3</sup>は 8 日に死亡した。9 日に寮委員会が開かれ、全寮の掃除消毒の実行が決議され、それが谷山初七郎生徒監から狩野亨吉校長へと伝達されて、学校側もこれに応じ、10 日を臨時休校にして、掃除消毒が行われた<sup>4</sup>。しかし、以後も患者は増え続け<sup>5</sup>、最終的に患者 13 名、死者 4 名<sup>6</sup>となった。これを機に、摂生室の体制が改革されて病院組織化され、校医が更迭されて、大学病院の医学士が校医となった。3 月 4 日、老朽化のため、元来、一時閉鎖、大修繕が予定されていた東西二寮に、南北中の新寮をも加え、全寮をいったん閉鎖した上で、更なる徹底的な消毒を実施することを、生徒監を通して校長が提案したところ、寮の総代会では満場一致で可決されたが、その日の深夜、中寮中堅会<sup>7</sup>の会員が疑義を三条にわたって生徒監に質し、翌 5 日朝、寮委員にもこれを示した。三条の疑義というのは、①寄宿寮が閉鎖された場合、宿所に窮する者が出る、下宿においてはすでに一高生を忌避する向きがある②物品を校外に搬出するに際して、ウイルスを撒布してしまう恐れはないか③寮を閉鎖しても、それに接近した学校に通うことで感染する恐れはないか、という点である。そうして、閉校して学生は帰省することを主張した。寮委員はこれを容れ、臨時総代会を開き、新たに、夏季休暇を繰り上げて、寮生の帰省を可能にすることを校長に求めたが、狩野校長は一日以上の休業は校長の権限を越える措置でもあるとして、寮生の要求を認めず、文部省に閉校を求めることも断った。その後、寮生たちは第二回の臨時総代会を開いたが、閉校、帰省を求める声が多く、6 名の請願委員を定めて、深夜、校長を訪ねさせたが、得るところがなかった。6 日、寮委員は解決案をまとめ、校長からも承諾を得て、第三回の臨時総代会に諮った。解決案の内容は、①閉寮をする②下宿先のないものは、南寮を十分に消毒した上でそこに滞在し、食事、飲料水は特別なものを用いる③教室全体を消毒する④夜具物品はそのまま持ち出す⑤ 7

日は休業とする⑥体調不良者には健康診断を行う、というものであった。下宿に困難を抱える者というのも総代会列席者の中では18名にとどまり、しかも、消毒のため一週間休校せざるをえないことが総代会の途中で生徒監から伝えられ、宿所に窮する者も一週間あれば帰省することが可能ということになり、南寮に滞在する必要もなくなった。こうして7日からの閉寮が決まり、寮生たちは、各々帰省していった<sup>8</sup>。13日に寮は開かれて、閉寮問題は一段落となる。

『第一高等学校自治寮六十年史』<sup>9</sup>は、この事件を「学校の管理権と自治権の相克」の一例として挙げ、「最終責任は学校にあること、したがって自治寮の自治には当然、限界があることを狩野校長が意識して強く主張した一例」<sup>10</sup>だとしている。この事例と比べた場合、今日の日本の大学と学生が置かれた状況については何が言えるだろうか。

一高生の状況にあって、今日のほとんどの大学生にないのは、寄宿という、身体に加え、精神的なまでに「密」な生活状況であろう。東大の駒場寮も含め、戦後の大学になお存在した寮の多くは、学生運動とも関わりながら、その多くが姿を消している。そのような「密」とはまた別だが、大学での人の集まり方は、授業ごとに異なる集団が次々に形成されては解消し、移ろってゆくなど、小中高の人の集まり方も異なり、感染リスクが高いということも一因となって、小中高では概ね授業が再開された後も、大学だけがオンラインでの活動を強いられているという状況がある。他方、明治時代になくて、今あるのは、SNSによるようなつながりのあり方である。ツイッター上で「#大学生の日常も重要だ」として、大学でのフィジカルなつながりの再開を求める運動も話題に上った。一高の腸チフスは局地的な流行だったが、今次のコロナウイルスは日本全国どころか世界的な流行となっている。明治の一高生のつながりは、空間的、身体的、精神的に「密」であったがゆえに強力なものとなりえたのだろう。対して、今日の学生の間でのつながりは、一高生のような「密」なものではなく、主にICTを通じた間接的なものにはなるものの、状況が世界的であることからして、より広範で、より強いつながりになりうるかもしれない。2020年8月下旬の本稿執筆時においては、コロナウイルスの流行状況は予断を許さないままであり、学生の間でのつながりのあり方がこの先どう変化し、どのようなものとなっていくかはなお不明ではある。しかし、大学や学生に限らず、国も問わず、全世界の全員がコロナウイルスの脅威にさらされている中、またウイルスの蔓延が落ち着くこととなったとしてもなお、おそらくはオンラインでのそれがコミュニケーションの手段を集約していただく中で、改めて「大学」に集うこと、「学生」としてあることの意味が問

われてくることになるだろう。いわゆる「専門家」の意見と、政治、行政の相克ということは現にあり、またそのことについて議論もあるが、コロナウイルスの世界的な流行という地球規模の課題の発生に対し、グローバルな連携の下に、最も効果的に活動できるのは、学問であろう。今回の危機で、オフラインでの移動と集合は困難になったものの、オンラインでのつながりは、従来の域を超えてかえって盛んになっている。オンライン会議システムの普及により、地域、国境を越えたミーティングはむしろ行いやすくなったほどである。そうはいつでもやはり、例えば、ヨーロッパ、中国、日本、アメリカと、様々に離れた人々が一堂に会する場合には、時差がまた別個の隔たりとなる。ICT技術の進展で、空間的な問題は多くクリアできるようになったが、地球が回っており、人が地に足のついた存在である以上、時間的な問題は、現状なお避けられない問題である。

大学がオンラインでの活動に閉じることに追い込まれ、しかし、曲がりなりにもそこへ閉じこもることができたのは、それを可能とする電子的な技術がすでに存在したからであり、より重要なのは、大学には文理を通じた様々な人的資本が備わり、態勢を整えることができたからであろう。かように、様々な分野にまたがって人材が集まっているという大学の強みは、まずはウイルス蔓延の克服から、さらに、今回の危機をきっかけに、人と人とのつながりのあり方の大きな変化が予想される中で、人間のあり方のトータルな再検討に当たり、大きな力を発揮するだろう。いまや世界中の誰にあって、当事者であることを避けられないこの課題に対して、特に学生、学者として何ができるかが我々に問われている。

## 注

- 1 昭和10年以来、駒場に在って、東京大学教養学部の前身となっている第一高等学校だが、当時は、本郷の東京帝国大学の隣、向ヶ丘に在り、「向陵」と呼ばれていた。
- 2 日本海軍が旅順のロシア艦隊を奇襲攻撃したのが2月8日、宣戦布告は10日である。
- 3 第一高等学校校友会編『校友会雑誌』第134号（明治37年2月25日）の雑報欄に「大沼憲三郎君逝く」と追悼記事のある大沼である。『校友会雑誌』第135号（明治37年3月25日）「閉寮の顛末」にも大沼と明記されている。
- 4 消毒法につき、大学病院の医師にも問い合わせ、夜具、畳は天日干し、室内を掃除した後、昇汞（塩化第二水銀）水を撒布、賄所の食器は曹達（ナトリウム塩）を投入した熱湯で洗浄した。病因はおそらく水とされ、9日の寮委員会前にはすでに井戸水の飲用が禁じられていた。
- 5 ただし、潜伏期間からして、罹患はいずれも消毒以前とされる。
- 6 『校友会雑誌』第135号には、見定二郎、宮島秀夫、菅沼旭太郎の追悼記事があり、大

沼憲三郎と合わせて4名となる。

- 7 寮内の風紀を担わんとする二年生を中心とした団体。「校風振肅の機関」を自任。
- 8 この頃、一高には北京大学の前身である京師大学堂からの留学生がいたが、彼らは帰省というわけにはいかないので、閉寮中、修学旅行が企画された。3月8日に新橋を出発し、藤沢、江ノ島、鎌倉、横須賀方面へ出かけ、14日に無事帰校した。この件は、「清国京師大学堂留学生ニ関スル第一年報告書」に記載されており、その下書が、「東京大学駒場図書館所蔵 狩野亨吉文書 清国留学生関係文書」として、web上で公開されている。<https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/kanok/page/home>
- 9 一高自治寮立寮百年委員会編、一高同窓会、1994年
- 10 同前、103-104頁